



# 窓あけて 窓いっぱいいの春

種田 山頭火  
たねだ さんとうか

春の花々、春の音、春の光、春の匂いが「窓」からあふれんばかりに感じられます。

「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」

春がめぐってくれば、サクらの花はいつものように咲きます。しかし、昨年と一緒に花見をしたのに、今年はこの世にはいない人もいます。唐代の詩人、劉廷芝の詩の1節がこれほど心に染み、サクらの花を眺めてもどうしても華やいだ気分にはなれない今年の春です。

春は人の五感を目覚めさせてくれます。

日脚の伸びと、一日一日明るくなる陽光。春の訪れの中でも一番早いのは「目の春」、次いでヒバリやウグイスの初鳴きが教えてくれる「耳の春」、ウメやサクラをはじめ花の香りが告げる「鼻の春」もあります。ほっこりとした

土の手触りやさわやかな風で知る「肌の春」もやって来ます。そして春菜や山菜の甘みやほろ苦さで分かるが「舌の春」です。春の到来を知らせる魚は春告魚、古くはニシンの異名です。

さて、読み方がむずかしい姓の一つに「四月一日」さんがあります。「わたぬき」と読みます。昔の人は陰暦の4月1日、表地と裏地のあいだから綿を抜いて衣替えをしていました。今では、綿入れを着る生活は遠くなりましたが、進学、就職と旅立ちの春、身についた甘えという綿を抜き、心の衣替えをして故郷を離れる人もいます。

「なせば成る なさねば成らぬ 何事も ならぬは人のなさぬなりけり」

江戸時代、財政危機の米沢藩を藩政改革でよみがえらせた上杉鷹山の歌です。サンテ

グジュペリの『星の王子さま』では、キツネが王子に「かんじんなことは目に見えないんだよ」と教えてくれます。感動的なアンデスの『ハチドリ』のひとしづくの昔話では、大切なことを教えています。何でもあきらめないこと。誰にでもやるべき役割があること。そして、それを愚直に実行すること。…。いつの時代も「なせば成る」との意志を持つことから始まるのでしよう。

「散る桜 残る桜も 散る桜」…。

今年の桜は、もう半分くらいが散ってしまっているのだろうか。



指宿市長  
豊留悦男  
とよどめ えつお